西ドイツにおけるレクリェーション空間の若干の特性

石　井　英　也

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　レクリェーションの発達と種類
Ⅲ　観光地域の立地
　Ⅲ—1　休暇旅行の特徴
　Ⅲ—2　観光地域
　Ⅲ—3　宿泊施設の多様化
Ⅳ　近接レクリェーション地域
　Ⅳ—1　ミュンヘンの近接レクリェーション地域
　Ⅳ—2　近接レクリェーション地域の分布
Ⅴ　レクリェーション空間の特性
　——むすびにかえて——

Ⅰ　はじめに

地理学的レクリェーション研究とは，レクリェーションという人間の一つの基本的機能に由来する空間的諸現象，すなわち空間組織型とその形成のプロセスの解明を目的とするが，それは今日の西ドイツの空間的特性を理解するのに必要不可欠なものになってきた[1]．すなわち，工業社会の進展に伴って都市化が進む一方，技術革新によって人間のモビリティーや自由時間は絶えず増大しつつあり，レクリェーションがあらゆる人々にとって重要な意味をもつ社会が形成されてきた．しかも，レクリェーションの空間的特性は，地理的位置や環境の差異を反映して，新しい景観，ひいては空間構造の形成に大きく寄与しているからである．

筆者は既に，西ドイツにおける地理学的レクリェーション研究の発達とその特徴について展望を試みた[2]．その結果，近年のレクリェーション研究は，現象それ自身の発展とともに著しく多様化してきたが，西ドイツでは長い人文地理学の伝統の上にたって，レクリェーション現象の分布パターンとその地域的特性や，集落あるいは社会・経済地理学的観点から地域形成を扱った研究に本来的成果がみられることを指摘した．ここでは，それらの成果に拠りながら，とくに景観形成力の強いレクリェーション現象を取りあげ，日本との比較を念頭におきながら，その特徴，それによって形成された地域，ならびにその意味を検討することによって，西ドイツにおけるレクリェーション空間の若干の特徴を明らかにすることを目的とする．

Ⅱ　レクリェーションの発達と種類

西ドイツのレクリェーション空間を検討するまえに，ここではまず，レクリェーションの発達とその種類について概観しよう．レクリェーション活動のうち，最も代表的なものである旅行は，ヨーロッパでは巡礼や貴族の巡遊などの形で古くから行なわれたが，これらは保養や楽しみを目的としたものではなく，近代的な旅行の発端は，18世紀後半から広まったブルジョア階級による温泉地での保養

や海水浴に求められるのが一般である[3]．休暇旅行が一般に普及したのは，19世紀後半のことである．

伝統的な農業社会から近代的特性をもつ工業社会への移行が遅れたドイツでも，同じ頃，温泉地への旅行のほか，ロマン主義運動に基づく画家や詩人達の旅，探険や学術調査のための登山，あるいはブルジョア階級の避暑などが発達した[4]．これらは社会的特権階級によって行なわれたが，この頃一方では，産業革命をへて人口が都市に集中するにつれて，より広範な階層の人々によって都市週辺でのレクリェーション活動が行なわれるようになった．しかし，休暇が法的根拠をもち，多くの人々がレクリェーションを享受するようになったのは，今世紀に入ってからである．旅行の解放は，ホワイトカラーで1920年代，下層労働者にとっては，やっと第二次世界大戦後実現されたといわれている．

西ドイツでは第二次世界大戦後，「奇跡の経済復興」といわれた経済力の上昇を背景に，レクリェーション活動が著しく普及した．とくに，1955年頃以降の発達が目覚ましい．たとえば，休暇を利用して長期の旅行を行なうものの全人口に対する割合は，1954年にはまだ24％にすぎなかったが，1970年には42％，1978年には57％にも達している[5]．そのほか，後で述べる週末のさまざまなレクリェーション活動も盛んである．

このレクリェーションの発達は，多くの条件に恵まれてもたらされてきた．断片的な資料ながら，いくつかの要因をみてみると，西ドイツでは週5日制の労働契約が一般であるが，労働時間が減少し，そのため1日あたりの平均余暇時間は，1952年には2.5時間であったが，1976年には約4時間にふえたという．一方，所得が増加し，個人支出に占める余暇支出の割合は，1970年には14％になり，今日では約18％に達するという．また，都市化の進展，就業構造の高度化，自家用車の普及，あるいはレクリェーションに対する意識の変化なども大きな条件になった[6]．さらに，休暇制度に関して，労働者は年間3週間の有給休暇を要求する法律的権利をもっており，しかも労働協約に取り決められる実際の休暇日数は，多くの場合4週間またはそれ以上となっていることなども，西ドイツのレクリェーション活動を活発にした要因であろう．

西ドイツにおけるレクリェーション活動は，実に多種多様である．これを整理する視角はいくつか存在するが，L. Czinki と W. Zühlke は，レクリェーション機能を生理学的観点から，1日の疲れをとるもの（Entmündung），1週間の疲れをとるもの（Entspannung）と1年間の疲れをいやすもの（Erholung）とに分類した[7]．彼らは，西ドイツの人々の年平均休暇日数を20日，休・祭日を105日，労働日数を240日とみなし，平日の余暇時間を4時間，休暇や休日時の余暇時間を13時間と仮定して，これら三つのタイプの余暇時間の比を72：18：10と求めた．

1日の疲れをとるレクリェーション活動としては，西ドイツにおいても，住居内での読書・家族の団欒・テレビ観賞などのほか，車と庭の手入れ，あるいは住宅付近での散歩などが一般的である．余暇活動の地理学的研究に長い間取り組んできたミュンヘン大学の経済地理学研究室の成果によっても，時間的にみると，このタイプの余暇活動が全体の約70％を占めることが明らかにされている[8]．週末のレクリェーションとしては，都市内の公園や緑地での散策，スポーツ活動や文化活動のほか，郊外への小旅行や別荘での休養といったものが代表的である．休暇時のレクリェーションは，スポー

ッ・保養・見物などを目的とした旅行である．ここでは，景観形成力という観点から，あとの二つを対象とする．そして西ドイツの従来の研究成果に従い，休暇旅行に依拠する観光地域 (Fremdenverkehrsgebiet) と，主に週末のドライブや小旅行に基づく近接レクリェーション地域 (Naherholungsgebiet) にわけて，それらの空間的特性を検討する．近接レクリェーションとは相対的な概念で，比較的短期の，比較的小さな移動距離によって特徴づけられるレクリェーションのことである．西ドイツでは一般に，その時間的特性は数時間から2～3日に至るもので，空間的には人口高密度地域からおおよそ100～150kmの範囲内に顕著にみられる現象と考えられている[9]．

Ⅲ　観光地域の立地

Ⅲ—1　休暇旅行の特徴

休暇を利用して行なわれるレクリェーション活動は，余暇活動全体の中で時間的に占める割合は小さいが，旅行という形で行なわれることが多い．それは，地域に与える経済効果が多大なため，地理学の分野では早くから注目されてきた．

既に述べたように，休暇旅行が著しく普及し，西ドイツは，ヨーロッパの中でも最も旅行が盛んな国の一つである．近年では，その旅行強度の伸びはさすがに弱まってきたが，一方では年2■の休暇旅行を行なう傾向が強まり（1978年に7.8%），まだ発展の余地が残されていると考えられている．西ドイツの人々が好むこのタイプのレクリェーション形態は，温泉・海岸・山地での保養，キャンプ，あるいは海水浴，スキーなどであるが，その一つの特徴は，温泉・清浄な空気・水面や積雪など，恵まれた自然資源の存在を必要とすることである．そのため，観光地域は特定の地域に集中して立地する傾向にある．

第1表　西ドイツの人々の主要休暇旅行先(1978)

目　的　地	休暇旅行数	割合
	(千)	(%)
バイエルン州	3,600	13.8
オーストリー	3,400	12.9
イタリー	2,700	10.2
スペイン	2,600	9.8
バーデン・ヴュルテムベルク州	1,900	7.1
シュレースヴィッヒ・ホルシュタイン州	1,600	6.1
フランス	1,300	4.9
ユーゴスラヴィア	1,200	4.6
ニーダーザクセン州	1,100	4.3
ノルトライン・ヴェストファーレン州	700	2.8

出典：K.Ruppert (1980), 注 1)による．

第1表は，1978年における西ドイツの人々の休暇旅行の主な目的地を示したものである．外国旅行が多いことが，一つの大きな特徴である．同年の全休暇旅行のうち，58.3%が外国への旅行であった[10]．しかし，そのうちのほとんどは，ヨーロッパ内の国々へのものであった．国別にみると，オーストリー，イタリー，スペインが多く，次いでフランス，ユーゴスラヴィアである．

この事実は，ドイツ人の南国やラテン文化への伝統的憧れといった気質ばかりでなく，ヨーロッパの空間構造の特徴をも示唆している．ヨーロッパの観光地域の分布を研究したW. Ritterは，ヨーロッパの東西軸と南北軸ともいえる，西ドイツを中心とした人口稠密地帯を中核として，圏構造的に観光地域が形成されていることを指摘している．彼によれば，ヨーロッパ的スケールでは，シュレースヴィッヒ・ホルシュタイン州の北部とドナ

ウ川以南のバイエルン州を除く西ドイツは，全て内帯に属する．ここでの内帯とは，都市郊外のレクリェーション地が主で，地形の関係からスキー場に乏しく，暖かい海水浴場をも欠くといった共通の特徴をもつ地域である．内帯の人々は，これらのレクリェーションを外側の外帯に依存する．内帯はまた，過密傾向で，既に観光地の開発余地が少なく，むしろ景観の保持に力を注いでいるという特徴をもつ[11]．これらの特徴が，西ドイツのレクリェーション空間を規定している第1の側面である．

Ⅲ—2 観光地域

前節では，西ドイツでは外国旅行が盛んで，ヨーロッパというスケールでみると，西ドイツの観光地はそれほどの地位を占めていないことを指摘したが，それにもかかわらず，バイエルン，バーデン・ヴュルテムベルク，シュレースヴィッヒ・ホルシュタイン，ニーダーザクセン，ノルトライン・ヴェストファーレンの諸州は，西ドイツの人々にとって重要な観光地になっている（第1表参照）．これは，アルプスや地中海諸国との競合にもかかわらず，西ドイツの観光地もかなりの魅力を有していることを示している．とくにバイエルン州は13.8%を占め，西ドイツの人々の最も主要な休暇旅行地となっている．

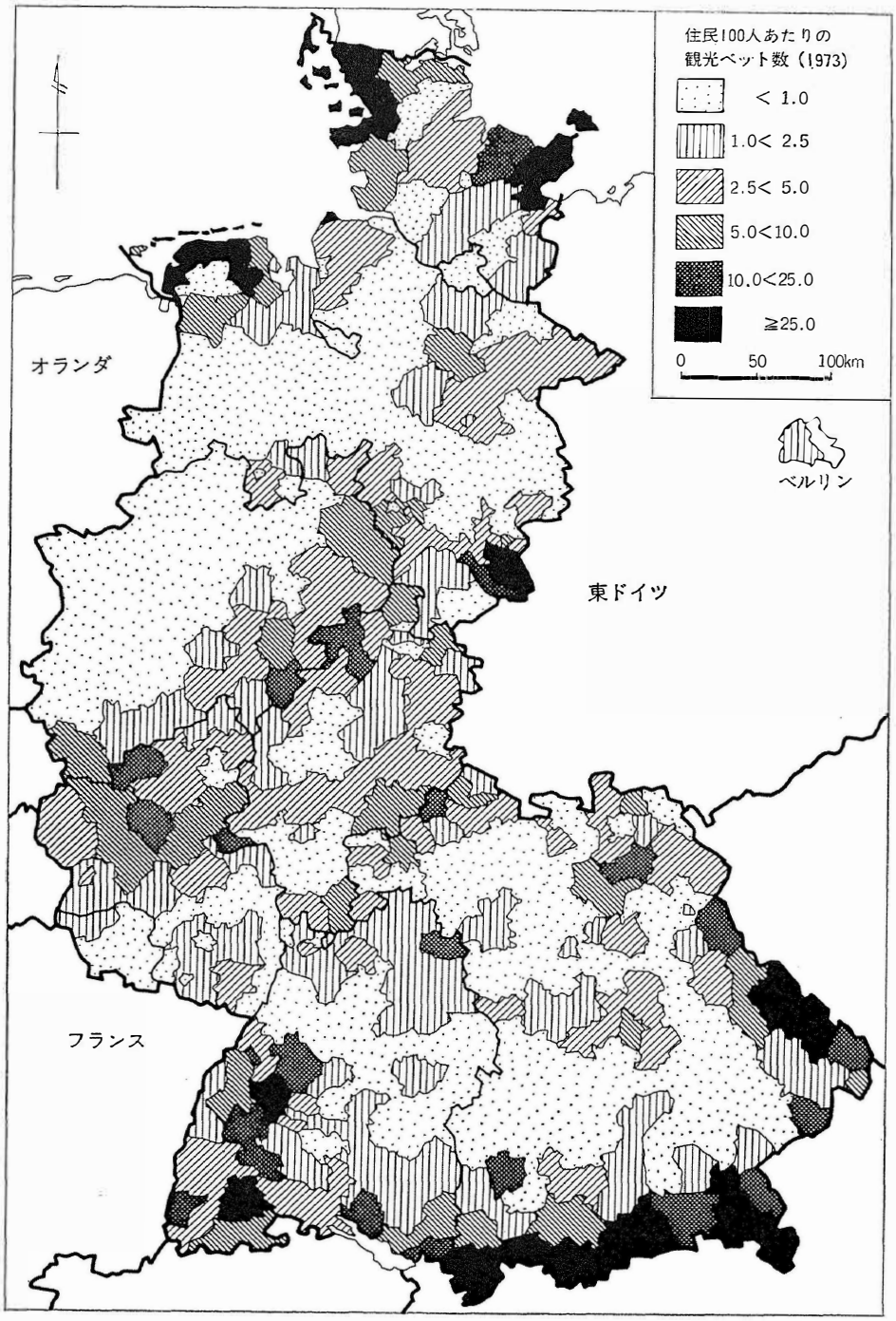
外国人による旅行は，西ドイツでは僅かにみられるにすぎない．観光客の宿泊総数に占める外国人の割合は，おおよそ8%を占めるにすぎず，たとえば，ハイデルベルク・バイロイト・オーバーアマーガウ (Oberammergau) などの文化的に特徴のある市町村や，西ベルリン・ミュンヘンなどのいくつかの大都市を除くと，それはほとんど意味をもたない．

西ドイツの観光地域については，既に1958年に，H. Hahnが詳細な分布図を作成した[12]．彼は，海水浴場・温泉・保養地・その他という統計上の分類のほかに，収容力・宿泊数・季節性・滞在期間・外国人宿泊の割合などの統計を利用して，西ドイツの観光地の分布図を作成し，その地域的特性を明らかにした．それによれば，ドイツアルプス地域，シュヴァルツヴァルト，ネッカー・ライン・モーゼルの各流域，ヴェスターヴァルトからザウアーラントにかけての地域，ハルツ山地，ヴェーザーベルクラントと北部海岸地域が主要な観光地域であった．

第1図は，1973年の郡 (Landkreis) ごとの観光強度，つまり住民あたりの観光客収容力（ベット数）から観光地域を示したものである．これによれば，アルプス，シュヴァルツヴァルト，バイエリッシャーヴァルトと北海・バルト海沿岸地域が主要な観光地域で，次いで，ハルツ，ローター山地域，アイフェルとフンスリュック，レーンなどが人気のある観光地域となっている．

二つの図を比較すると，西ドイツの観光地域は，南部の山地域，北部の海岸と中央部の丘陵地域からなるという基本的傾向には変わりがない．しかし，中央部の河川流域やザウアーラントなどの丘陵地での衰退と，一方では，アイフェル，バイエリッシャーヴァルトという，いわゆる西ドイツにおける低開発地域での急成長などを読みとることができる．

北部の観光地は，北海沿岸では沖合10～20 km に長く連なっている東フリージアと北フリージア諸島に集中している．もちろん，西ドイツの代表的な海水浴場地域である．ジルト (Sylt)，ノルダーネイ (Norderney) 両島や大陸側のクックスハーフェン (Cuxhaven) などがその中心地である．この地



第1図　西ドイツにおける観光地の分布
出典：Bundesforschungsanstalt für Landeskunde und Raumordnung (1976) ：Atlas zur Raumentwicklung 6, Freizeit

域の海水浴場としての発展は，19世紀初期に始まった．その後，漁業や海上交通の衰退とともに，観光が主要な経済部門にまで成長した．海水浴場地の観光は，季節性がとりわけ著しい．高々夏4か月が，観光シーズンであるにすぎない．そのため，この地域ではペンションなど小規模な宿泊施設が多いのが一つの特徴である．古い資料であるが，H. Hahn によれば，それは宿泊収容力の60～70%を占めていたという．この地域は，西ドイツ全体の観光地といえるが，観光客の大部分は，ノルトライン・ヴェストファーレンやニーダーザクセン州の工業地帯からで，南部からは少ない[13]．沖合の諸島は沿岸州で，干潮時には島列と大陸の間が干潟となるため，週末の行楽の地でもある．

一方，バルト海の海岸は，急斜面や崖をなすことが多く，海水浴場は，ダーメ (Dahme) からトラーフェミュンデ (Travemi inde)にかけてのリューベック湾に集中している．キール・リューベック間の湖沼地域は保養地として知られ，ここには別荘集落が発達している．バルト海は交通上要衝の地であるため，この地域は近年，通過観光地域としての性格を強めつつある．ハンブルクの南方には，氷堆石丘であるリューネブルガー・ハイデがあるが，ここはハンブルクやハノーファーの人々の近接レクリェーション地である．

中央部の丘陵地域には多様な観光地が発達するが，とくに温泉・鉱泉資源に立地したものが多いことが一つの特徴である．ドイツの温泉・鉱泉資源は，中位山地のうち，ハルツ，ヴェーザーベルクラント，ラインラントからタウナスにかけての地域とシュヴァルツヴァルトに多く存在する．前3者は，それぞれ塩泉，硫黄泉，炭酸泉が多いことで知られる．そのため，ハルツにはブラウンラーゲ (Braunlage)，ヴェーザーベルクラントにはマインベルク (Bad Meinberg)，タウナスの南斜面にはヴィースバーデン，ホームブルク (Bad Homburg) やナウハイム (Bad Nauheim) などの温泉観光地が発達している．これらの温泉地は，かつては最も華やかな観光地であったが，第二次世界大戦後の観光の多様化の中で，その地位を次第に失ってきた．最近，これらの地域では，さまざまなレクリェーション需要に対処すべく，インフラストラクチャーの整備に力が注がれてきた．ヴィースバーデンなども，既に温泉地としての機能を喪失したが，観光拠点あるいは総合的な観光都市として発展をみている．

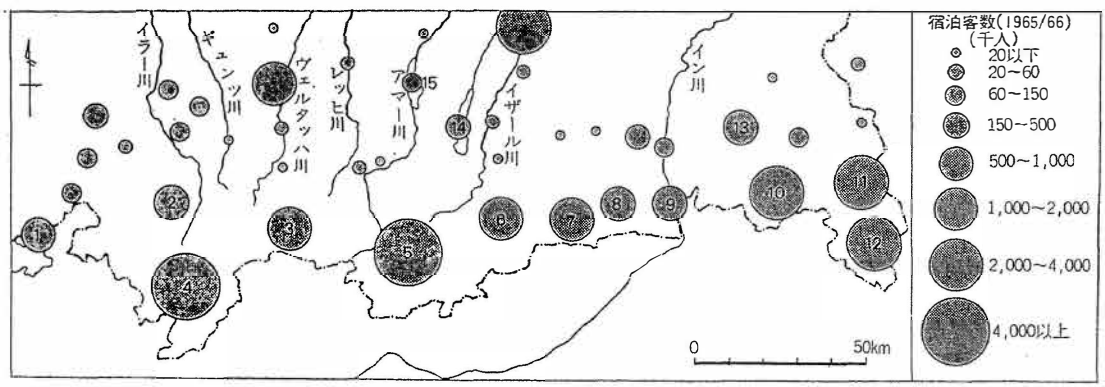
ドイツ中央部では，標高600 m 以上の地域は冬季ほぼ確実に雪におおわれるが，ハルツ山地とザウアーラントの一部以外にスキー場は発達していない．第1図からうかがえるように，中央部の観光地は，ハルツやレーンを除くと人口密集地域に隣接して立地している．そのため，これらの地域は，休暇旅行に基づく，いわゆる観光地としての性格ばかりでなく，週末などに利用されるレクリェーション地域としての性格を強く併せもつ．このことは，各観光地の季節性や観光圏に関する調査からも容易に推測することができる[14]．この意味では，ライン，モーゼル，ラーンやヴェーザー川流域も，伝統的な重要な観光地域である．この地域には，別荘も多くみられるが，谷は工業地帯の汚染された大気の侵入にしばしば悩まされるため，その多くは丘陵に立地している．これは，この地域が観光地としての魅力を失ってきた原因の一つであろう．

国境地帯を縁どるように分布している南部の観光地域は，西ドイツの最も重要な観光地域である．西ドイツは，1945年の国土の分割によって多くの伝統的な観光・レクリェーション地域を失ったが，

南部の観光地は，第二次世界大戦後急速に発達した．中位山地に属するシュヴァルツヴァルトは，さまざまな種類の温泉や鉱泉に富む．温泉地としては，バーデン・バーデン，バーデンヴァイラー(Badenweiler)，クロツィンゲン(Bad Krozingen)などがよく知られている．そのうえ，その名の由来となったドイツトウヒとモミからなる暗緑色の針葉樹林が多く，西ドイツきっての保養地(Luftkurort)となっている．この地域は冬季の保養地としても知られ，ここには冬季の宿泊数が夏季の4分の1以上を占める観光地が多い．そのなかでも，フライブルク南東のフェルトベルク(Feldberg)は，冬季スポーツ観光の中心地である．

チェコスロヴァキアとの国境に沿って伸びるフィヒテル山地からバイエリッシャーヴァルトにかけての地域は，西ドイツでは新しい観光地に属する．かつてこの地域では，石炭・鉄や陶土の採掘が行なわれたこともあって，道路や宿泊施設の整備が進み，いわゆる観光基盤の形成は早かったが，第二次世界大戦後の国土の分割によって大きな痛手を受け，人口密度の低い低開発地域として留まってきた[15]．しかし，近年，恵まれた自然が注目され，後で述べる農家民宿や別荘が発達し，この地域は，西ドイツの重要な観光・レクリェーション地域になってきた．ボーデンマイス(Bodenmais)などがその中心地である．

アルプス地域は，前地地帯も含めて，全ての空間が観光・レクリェーション地域とみなされうる．オーストリーとの国境から30～40kmの範囲が，とくに強く観光地化されている．そのなかでもとりわけ著名な観光地域は，南アルゴイ，オーバーバイエルン県西部のヴェルデンフェルザーラントと東部のベルヒテスガードナーラントである(第2図)[16]．これらの地域は，何れもアルプ経営地域に属



第2図　アルプスの観光地
1. ボーデン湖地域　2. 西および中央アルゴイ　3. 東アルゴイ　4. 南アルゴイ
5. ヴェルデンフェルザーラント　6. イザーヴィンケル，コッヒェル湖地域
7. テーゲルン湖地域　8. シューリアー湖地域　9. イン川流域　10. キームガウ・アルプス
11. ルッパーティヴインケル地域　12. ベルヒテスガードナーラント　13. キーム湖地域
出典：E. Grötzbach (1968)，注16)より作成

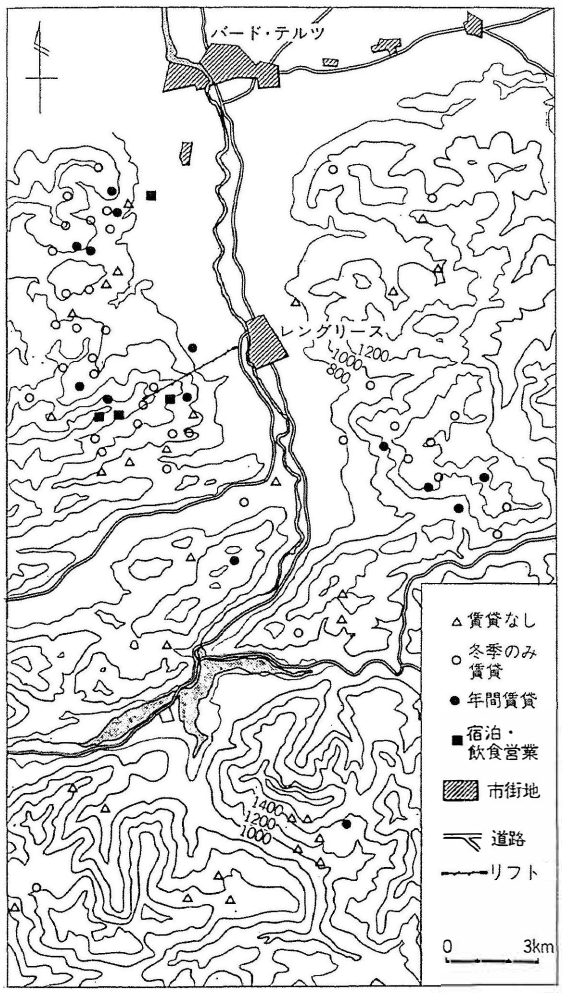
し，谷間の耕地や干草刈場の所有規模は一般に5～10haと小さい．アルプは，部落共同体(Gemeinschaftsalm)か組合の共同所有(Genossenschaftsalm)，あるいは大土地所有者や国有地の借地(Berechtigungsalm)で，かつては農業生産性の低い地域であった[17]．そのため，これらの地域は，古く

から岩塩や鉄の採掘，あるいはそれらの交易に依存せざるを得ないという共通の性格を有していた．商業的要素の導入の早いこれらの地域が，観光化という点でもアルプスの先進地となってきた．

たとえば，アルゴイ地方の代表的観光地の一つであるヒンデランク (Hindelang) は，当初アレマン人特有の農村社会として築かれたが，先進地のボーデン湖地域に近いこともあって，亜麻の栽培などの導入が早かった．15世紀にはマルクトに昇格し，チロールのハレ (Soldad Halle) からボーデン湖に運ばれる塩の積替地となり，商業が発達した．15世紀末には鉄鉱山も開発され，それは，交易都市という機能と周辺の農村と結びついて，馬の蹄や農機具製造を興し，住民は高い生活水準を謳歌した．その後，鉄はロートリンゲン，亜麻織物はイギリスとの競合に破れ，さらに1815年には，バイエルン王国が自国の塩生産を保護するために関税障壁を設けたため，ヒンデランクは大打撃を被った．しかし，19世紀中頃には，イメンシュタット (Immenstadt) に通じる鉄道の開通やアルピニズムの興隆に伴って逸早く観光化に力を注ぎ，アルゴイのオベルストドロフ(Oberstdarf) とともに，バイエルンの最も古い観光地として発展してきた[18]．その後，ヒンデランクは，今世紀に入って，とくに1920年代以降，登山のみならず，温泉，夏の避暑，冬季スポーツなどの開拓に努め，今日の地位を築いた．このようななかで，かつての鉄加工業は，現在では観光化と結びついて，登山・スキーのスポーツ用具や中世武器の模倣品の製造に引継がれている．

一方，たとえば，イザール川からイン川にかけてのオーバーバイエルン県中央部は(第2図参照)，アルゴイなどと同様，アルプ経営地域に属する．しかし，この地域の農家は，30ha ほどに達する大規模な個人所有のアルプ (Privatalm) をもつものが多いのが特徴である．それが一つの理由となって，この地域では，アルゴイなどに比べて，一般に観光の導入が遅れた．ところで，アルプ経営はオーバーバイエルンでは6月から9月に行なわれるにすぎず，アルプ小屋は，それ以外の時期には利用されなかった．そこで，第二次世界大戦後，スキー客の宿泊需要が増大するにつれて，それらの多くが，個人や団体に賃貸されるようになった．第3図は，ミュンヘン南方・イザールヴィンケル地方におけるアルプ小屋の観光的利用を示したものである[19]．南部では，国有地の賃貸アルプが含まれるため，観光的に利用されているものは少ないが，北部から中央部にかけては個人有アルプが多く，その利用は個人の自由になるため，多くが観光的利用に供されている．小屋を貸すことは，単に現金収入源を獲得するばかりでなく，小屋の維持にも好都合である．増築や改築をして1年中賃貸し，1部でアルプ経営を行なうものも出現した．観光的利用は，農業の機械化が難しいところで盛んという．このような観光とアルプ経済の共生的関係を軸に，この地域でも，第二次世界大戦後，古い観光地であるテーゲルンゼー (Tegern See) 地域を中心に多様な観光化が進められてきた．

現在，オベルストドルフ，ヒンデランク，ガルミッシュ・パルテンキルヒェンやバート・ライヒェンハル (Bad Reichenhall) など，アルプス高地の谷にある観光地は，温泉や夏・冬の保養地としてばかりでなく，スキー・ハイキングや登山の基地として，1年中観光客で賑わい，季節的変動の少ない観光地となっている．かつて人気のあったボーデン湖地域は，近年では観光地としての重要性を失ってきた．アルプス前地には，モレーン・湖沼・湿地など，氷河の影響を受けた，変化に富んだ地形が展開している．そのため，ここは，ミュンヘンなどの近接レクリェーション地域でもある．ここ



第3図　イザールヴィンケル地方における
アルプ小屋の観光的利用(1965)
出典：K. Ruppert (1967), 注19) より作成

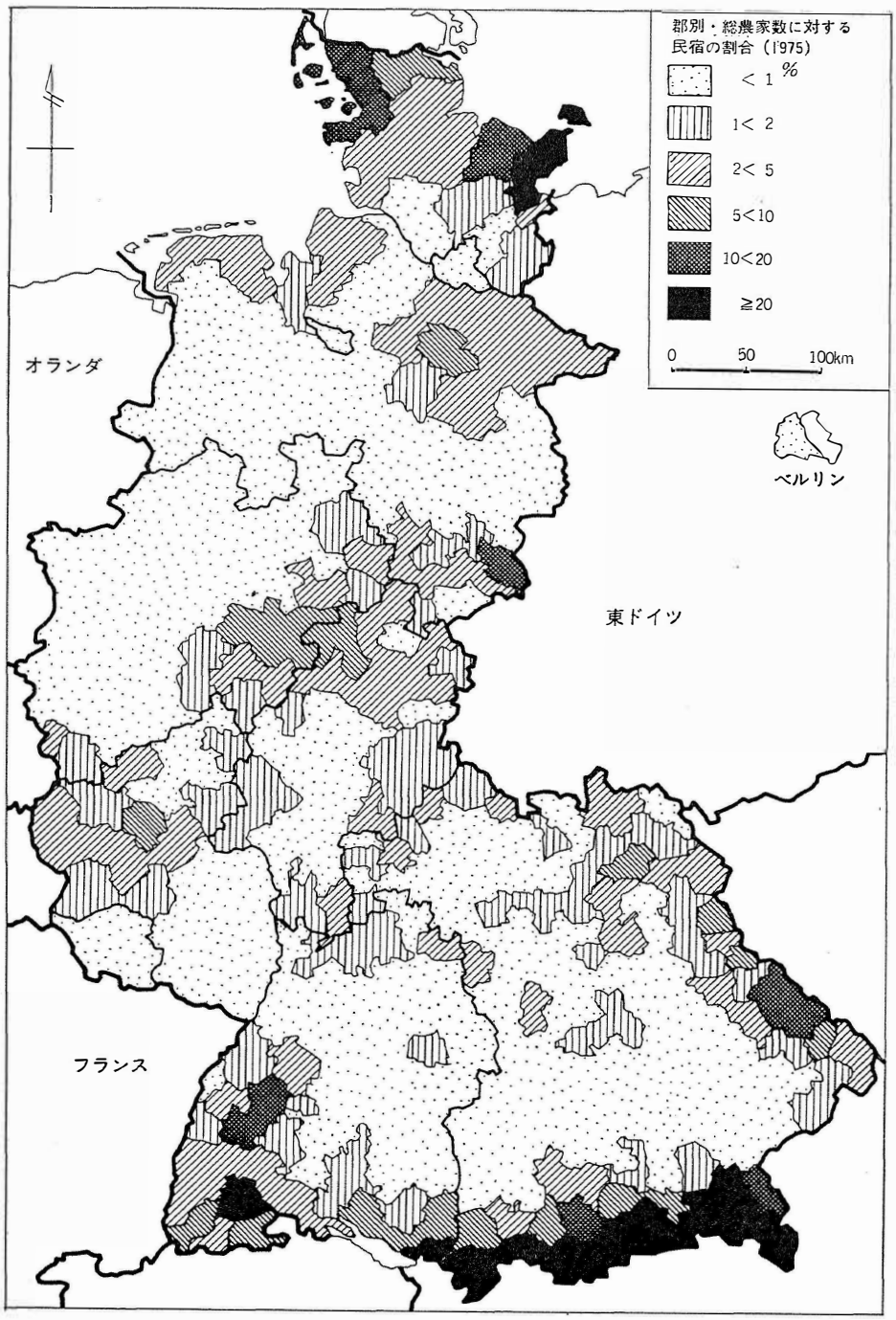
は，隠退後の高齢者の移住地として人気があり，別荘も多い．ドイツアルプスは，他の諸■のアルプス地域と異なって，著しい人口増加を経験してきた[20]．既にみたような多様な観光化の進展が，その大きな理由と考えることができよう．

Ⅲ－3　宿泊施設の多様化

観光地域の一つの特徴は，宿泊施設の存在である．西ドイツの観光統計は，延宿泊数5,000以上の市町村についてのみ収録してあるが，そのような市町村は約2,400である．それらの市町村の宿泊収容力は，1978年にベット数にして約200万である．これには，ホテル (Hotel, Gasthof)，ペンション (Fremdenheim, Pension)，宿坊 (Hospiz)，サナトリウム (Sanatorium, Kuranstalt)，民宿 (Privatvermieter) などが含まれるが，ユースホステルや子供の休暇の家 (Kinderheim) は含まれない．宿泊施設の多くは，個人経営である．収容力は，1960年から1970年の間に倍増した．しかし，その平均利用率はおおよそ25％にすぎないという[21]．

ところで，宿泊施設に関して，近年の著しい特徴は，宿泊施設の形態が多様化してきたことである．高級ホテルの収容力が増大する一方，農家民宿や別荘，あるいはキャンプ場などが増加してきた．このことは，従来の観光地域を広域化し，複雑なものにする効果をもたらしてきた．ここでは，それらのうち，いくつかの特徴的なものについてみてみよう．

その一つは，「休暇を農家で (Urlaub auf dem Bauernhof)」というキャンペーンのもとで，著しく発達してきた，いわゆる農家民宿（部屋貸を含む）である．農家民宿数は，1972年に12,457戸で，これは全宿泊収容力のおおよそ8％にあたる．農家民宿の存在する市町村は4,000余（全市町村の17％）にのぼり，広く普及していることがわかる．州別には，バイエルン州が多く，40％近くを占めている（第2表）．R. Klöpper の市町村別民宿の分布[22]や，郡別の農家数に対する民宿の割合（第4図）から，その分布をみると，北海とバルト海沿岸，バイエリッシャーヴァルト，アルプス地域と



第4図　西ドイツの農家民宿地域
出典：K. Ruppert (1980)，注1）より作成

第2表　西ドイツの農家民宿(1972)

州　　名	民宿数	割　合
シュレースヴィッヒ・ホルシュタイン	2,058	16
ニーダーザクセン	1,464	12
ノルトライン・ヴェストファーレン	994	8
ヘッセン	841	7
ラインラント・ファルツ	357	3
バーデン・ヴュルテムベルク	1,891	15
バイエルン	4,849	39
ザールラント	3	0
計	12,457	100

出典：R.Klöpper(1974)，注22)より作成.

シュヴァルツヴァルト，それにハルツとザウアーラントに多い．既にみた西ドイツの主要な観光地域を反映しているが．とくに北部の海水浴場地帯と，人口密集地から遠隔にある粗放的な農業地域に集中して立地している．大都市の周辺20～50 km には，農家民宿はほとんど存在していない．

民宿を経営している農家は，ドイツ全体の農家数のうち2.2％を占めるにすぎないが，主要な民宿地域では，その割合は10％をこす．たとえば，ベルヒテスガーデン(Berchtesgaden) 郡では，半分以上（58.5％）の農家が民宿を経営している[23]．この地域は，既に述べたように，各農家の所有耕地が小さく，アルプは国有地の借地であるという特徴をもつ．そのため，アルプ小屋の観光的利用はできず，現全収入源の獲得手段として民宿が普及した．民宿経営は，2人部屋1室が成牛1～1.5頭の飼育に匹敵する収益になるといい，農家の場合，土地を購入することなく経営の拡大をはかることができる点で有利である．ほかに，農民が観光業に一種の憧れをもっていることや，農業構造改善策の一環として連邦や州の助成が行なわれていることなども，農家民宿発達の要因である[24]．しかし，全体的にみると民宿経営はあくまで副業で，アルプス地域においてさえも，それによる収益は1970年に農家収入の約10％にすぎなかったという．

景観形成という点で，近年のもう一つの特徴が別荘の増加である．別荘については統計資料が存在せず，その分布，利用などの実態は不明なことが多い．しかし，いくつかの断片的な資料から判断すると，西ドイツでは急速に別荘地域が形成されつつある．西ドイツでは，別荘の発達は，他の北西ヨーロッパ諸国と比べるとはるかに遅れた．1960年代，休暇旅行者のうち別荘を利用するものの割合は，スウェーデンで25％，フランス・ベルギーで10％であったが，西ドイツでは1～2％と見積もられていた．それでも1960年に，シュレースヴィッヒ・ホルシュタイン州には約4,400の別荘があり，ハンブルクだけで1,300世帯が別荘を所有していた[25]．ミュンヘンでは，1968年に，約7.3％の世帯が別荘を所有していた．この割合は，当然都市部で高く，抽出されたいくつかのミュンヘン市外の郡では3.3％であった．

バイエルン州の別荘に関するK. Ruppert と J.Maier の調査によれば[26]，1960年代後半に同州には約50,000の別荘が存在していた（第3表）．その分布をみると，僅かのものは都市部にあり，全てが休暇や週末に保養のために利用されるとは限らないが，ほとんどは近接レクリエーション地や観光地に分布しており，いわゆる別荘であることが明白である[27]．別荘の主要な分布地域は，半径ほぼ50 kmにおさまる大都市の周辺，すなわちミュンヘン南西の湖沼地域，ニュールンベルク北方のフレンキッシュ・シュヴァイツ，アウグスブルクやレーゲンスブルク周辺の森林地と，都市からより遠方(50～150km)のアルプス地域，バイエリッシャーヴァルト，レーンであった．このことから，別荘地

第3表　バイエルン州における別荘の分布(1968)

県	一戸建の別荘数	全家屋数に対する割合(%)	共同住宅形式の別荘数	全住宅に対する割合(%)
オーバーバイエルン	3,826	0.9	21,943	2.1
ニーダーバイエルン	678	0.3	2,879	0.9
オーバーファルツ	704	0.4	2,295	0.8
オーバーフランケン	871	0.5	2,474	0.7
ミッテルフランケン	1,107	0.5	4,535	0.9
ウンターフランケン	571	0.3	2,772	0.8
シュヴァーベン	1,155	0.5	4,959	1.1
総　計	8,912	0.5	41,857	1.3

出典：K. Ruppert u. J. Maier (1971), 注26) より作成.

は，居住地に近く，湖沼や森林など，良好な環境に恵まれた都市周辺部か，あるいは居住地から遠いが，観光インフラストラクチャーがよく備わった観光地域に立地していることがわかる．

それを示すデータはないが，西ドイツで別荘地として知られる地域は，ほかに北部沿岸地域，リューネブルガー・ハイデやアイフェルなどの人口密集地域の後背丘陵地とシュヴァルツヴァルトである．K. Ruppertらの調査によれば，別荘の利用日数は，一般に70～90日に達するという．都市周辺部に立地し，週末にも利用される別荘が多いことは，日本と比べると著しい相違である．このことは，両国の生活様式の差異ばかりでなく，人口密度・都市形態・地価・交通条件といった国土利用の差異を明瞭に反映している．

別荘の形態は，広壮な一戸建のものから，農家を改造したもの，個人所有であれ賃貸であれ，集合住宅形式のものなど，さまざまである．最後の型の別荘は，観光地に多い．西ドイツでも，著名観光地では，よそ者 (Ausmärker あるいはOrtsfremder) の土地所有割合が高く，一般にそれは15～20%に達する．そのため，地価や建設費の高騰がみられ，集合住宅形式の別荘が多くなってきた．観光地には，集団化した別荘地，いわゆる別荘集落もみられる．バイエルン州では，20を越える別荘集落があるが，それらのほとんどは，アルプス地域とバイエリッシャーヴァルトに立地している．

キャンプ場の発達も，近年の著しい現象の一つである．その数は，1978年に1,500～2,000か所であった[28]．正確な統計ではないが，それらの利用者の延宿泊数は，2,000万以上とみられている．キャンピングカーを利用した，恒久的なキャンプ場が多い．バイエルン州では，キャンプ場の約3分の1は，その目的で長期的に賃貸されているものである．この割合は，北ドイツではさらに高い．

キャンプ場の立地パターンは，他の宿泊施設に比して，より均等に分布しているのが特色である[29]．それらは，既に指摘した観光地ばかりでなく，人口密集地の後背レクリェーション地，とくに湖岸や，ヴェーザー・モーゼル・タウバーなどの河川流域にも多く立地している．これは，恒久的なキャンプ場が，週末にも利用しうる簡易な別荘としての機能をもつことの顕われである．キャンプ場はますます増加する傾向にあるが，環境汚染などの一因ともなり，キャンプ場の位置，装備，規模などに関して法的規制が行なわれるようになってきた．

IV　近接レクリェーション地域

IV—1　ミュンヘンの近接レクリェーション地域

近接レクリエーション現象の把握は実に難しく，その解明が叫ばれてから久しい．しかし，西ドイツでもまだ，その包括的研究の必要性が主張されている段階である[30]．そこで，ここではまず，ミュンヘン大学経済地理学研究室の成果[31]などを参考にしながら，ミュンヘンの近接レクリエーション地域をみてみよう．

ミュンヘンのような大都市では，都市内にさまざまなレクリエーション活動の機会があるが，前述の調査によれば，約89％の人々が週末や休日に野外でのレクリエーション活動を行なっていた．その形態は，自宅の庭での活動が多く，ついで公園や緑地での散策とスポーツ活動，シュレーバーガルテン (Schrebergarten) での草花の手入れ，それに市外へのドライブや小旅行という順序であった．ミュンヘンは大都市にもかかわらず，公園や緑地面積に恵まれ，1人あたりの緑地面積は，西ドイツではブレーメン，ケルンにつぐ．それは，市域面積 (311km²) の約10％を占め，重要なレクリェーション空間を提供している．これらの場所でレクリェーションを行なうものは，冬季には22％にすぎないが，春から秋にかけては50％を越える．

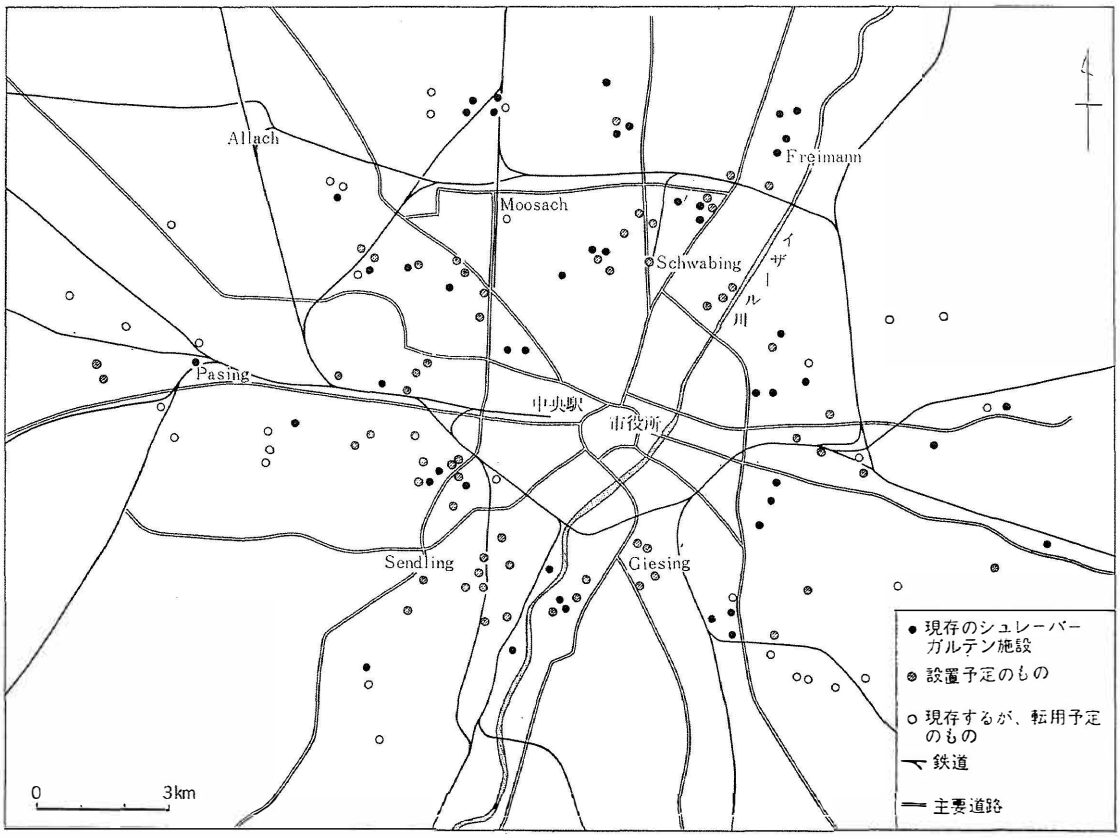
利用者の割合はそれほど大きくはないが，景観的に目につくのがシュレーバーガルテンである．これは，住居と分離した，200～600 m² ほどの小菜園のことで，その呼称は，19世紀中頃に「恵まれない人々が土に親しみ，健康を増進するために，小さな庭あるいは菜園を所有する機会が与えられるべき」と提唱したライプツィッヒの医師・Dr. Schreber に由来する．それは，クラインガルテン(小菜園) とも呼ばれ，地域によって若干事情を異にするが，普通，公共地の低額貸付地である．シュレーバーガルテンは，19世紀後半に，急速な都市化と住宅環境の悪化に悩まされたベルリンやライプツィッヒで発達し，1910年代にドイツ各地に急速に広まった．1919年には，シュレーバーガルテンの設置を促進する法律が制定されたが，このような経緯から，西ドイツでは，とくにルールや北部地方で発達している[32]．

ミュンヘンは，他の大都市と比べると少ないが，おおよそ135か所 (10,113区画)，面積にして約340haのシュレーバーガルテンを有している(第4表)．このうち，約7,000の区画，面積にして約250ha

第4表　大都市のシュレーバーガルテン(1972)

大　都　市	人口(1,000人)	シュレーバーガルテン 区　画　数	人口1,000人 あたりの区画数
ベルリン	2,176	47,778	22.0
ハンブルク	1,832	36,000	19.7
ミュンヘン	1,243	10,113	8.1
ケルン	857	7,920	9.2
エッセン	713	7,375	10.3
デュッセルドルフ	687	11,750	17.1
フランクフルト	669	16,725	25.0
ドルトムント	652	30,916	47.4
シュツットガルト	616	37,753	61.3
ブレーメン	603	28,262	46.9
ハノーファー	540	22,160	41.0

ミュンヘン市，シューレーバーガルテン課での聞きとりによる．



第5図 ミュンヘンにおけるシュレーバーガルテン施設の分布(1973)
ミュンヘン市・シュレーバーガルテン課で筆者作成

は市有地で，他のほとんどは，連邦鉄道からの借地である．1つのシュレーバーガルテン施設の面積は大小さまざまであるが，それらは，市の中心部を除く名地に分散している（第5図）．一般に公共交通手段で行きやすい場所に立地している．古い施設は，多くが60歳以上の，年金生活を送る層に利用されているが，新しく設置されたものは，若年層の利用も多い．シュレーバーガルテンは，かつては野菜作りに利用されたが，現在ではレクリェーション的機能が強まり，花卉を植えたり，芝地として利用されている．シュレーバーガルテンに対する需要が多く，社会政策的にも，景観的にもその意義が大きいが，第5図にみられるように，都市計画上転用せざるを得ないものもあり，増設には公有地の不足が難問になっている．

一方，週末や休日のレクリェーションとして，行なわれる頻度は小さいが，景観形成力という点で重要なのは，市外へのドライブや小旅行である，ミュンヘンでは，約3分の1の人々が，規則的に郊外へレクリェーションに出かける．とくに，夏の天気の良い日には，60%以上の人々が出かけるという[88]．出かける回数は，冬5.7回，春と秋が7.6回で，夏7.7回であった．

第5表は，季節ごとにミュンヘン市民の近接レクリェーション地を示したものである．人気のある

第5表 ミュンヘンの近接レクリェーション地域

レクリェーション地域	冬	春と秋	夏
	(%)	(%)	(%)
ミュンヘン周辺の森林地域	16.8	25.4	16.9
ミュンヘン北郊 (Dachauer Moosなど)	5.0	7.8	6.9
シュタルンベルガーゼー・アマーゼー地域	4.7	16.9	29.9
アルゴイ・ボーデン湖地域	2.7	3.3	2.4
オーストリー	19.7	6.6	5.5
ガルミッシュ・パルテンキルヒェン地域	10.3	7.4	4.8
テーゲルンゼー・シュリアゼー地域	26.2	18.0	16.7
キームゼー地域	5.9	6.7	9.5
バイエリッシャーヴァルト地域	4.0	3.5	3.2
その他	4.7	4.4	4.2

出典：K. Ruppert u. J. Maier (1970), 注 8) より作成.

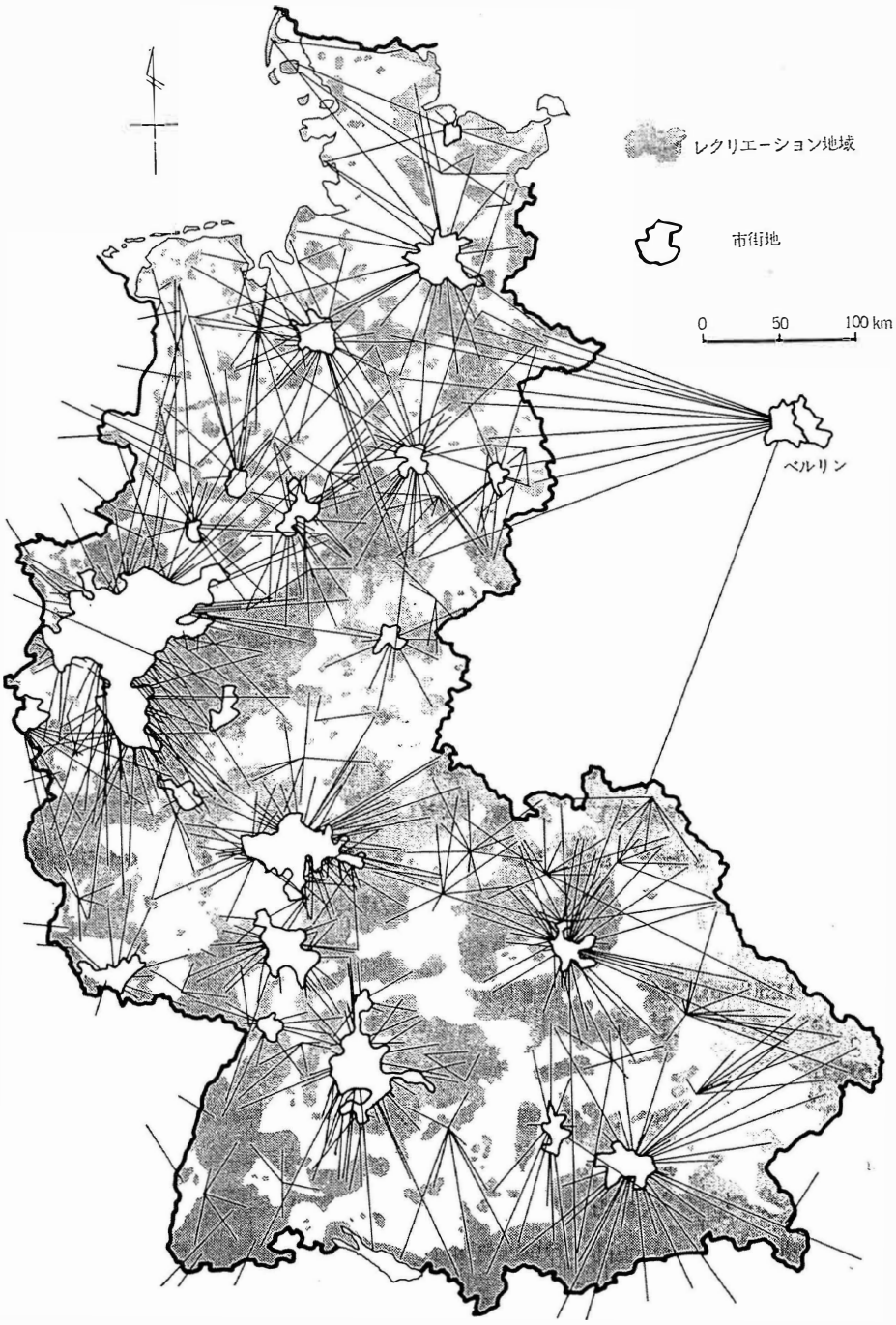
レクリェーション地は，季節によって異なる．好んで訪れられる地域は，冬には，オーストリー，テーゲルンゼー・シュリアゼー (Schliersee) 地域などのスキー場地と，ミュンヘン南部の森林地域である．後の二つは，他の季節にも訪れる人が多く，ドイツ人の森林愛好の気質をよく示している．春から秋にかけては，ほかに，前世紀からのレクリェーション地であるシュタルンベルカーゼー (Starnberger)・アマーゼー (Ammer) 地域や，キームゼー (Chiem) 地域など，アルプス前地の湖沼地域に人気が集中する．アルプスの著名観光地域は，冬季のガルミュシュ・パルテンキルヒェンを除き，ミュンヘンのレクリェーショ地域としての意義は小さい．

このように，近接レクリェーション地域は一般に都市から半径，おおよそ50 km の範囲内に顕著に発達する．しかし，第5表にみられるように，さらに遠方に出かけるものも多い．ミュンヘンでは，ドライブや小旅行を行なうものの約60%は，中心部から100 km 以内の地域に出かけるが，33%は100～250km，約7%は250km以上離れた地域を訪れる．

IV—2 近接レクリェーション地域の分布

西ドイツでは，かなりの割合の人々が，週末や休日に規則的にドライブや小旅行を行なう．もちろん，その割合は，居住地域・社会階層・年齢層などによって異なる．それは，一般に市町村の人口が増加するにつれて大きくなり，大都市で30%台，中都市で20%台，小都市や農村部では10%台とみられている．社会階層的にみると，上層では50%を越えるが，労働者階層では10%以下にすぎない[34]．

第6図は，G. Olschowy とW. Mrass による人口5万以上の都市住民の週末のレクリェーション地を示した図である[35]．近接レクリェーション地域は，人口50万以上の大都市周辺に顕著に発達している．すなわち，ハンブルク，ミュンヘン，ケルン，デュッセルドルフ，フランクフルトからヴィースバーデン，シュツットガルト，ブレーメン，ハノーファー，ニュールンベルクと，デュイスブルクからドルトムントに至るルール地域の周辺である．ドイツでは，近代統一国家の成立が遅れ，かっての諸邦の中心地が各州や地方の中心になっており，都市機能が比較的分散していることが，西ドイツ



第6図 西ドイツの近接レクリェーション地域
出典：G. Olschowy u. W. Mrass (1956), 注35) より作成

の都市システムの特徴である．近接レクリェーション地域の分布は，その特性をよく反映している．しかし，ライン流域からルール地域に至る人口密集地域の周辺では，とくに著しい発達がみられる．

近接レクリェーション地域の広がりは，多くが，各都市から半径100kmの範囲に収まるが，これを越えるのも珍らしくない．一般に日帰り圏は，往復所要時間と目的地での滞在時間，それに宿泊費と交通費がほぼ釣り合う線で画定されるが，近年では自動車交通の発達によって，その範囲は100kmを越える．西ベルリンは飛地という性格上，例外である．

西ドイツでは，日本と比べると，人口の特定地域への集中やその周辺のスプロール化の程度が低い．一方，環境保全に力が注がれていることもあって，都市の周辺には自然に恵まれた景観が展開している（第6図参照）．レクリェーション地域は，ミュンヘンの例でみたように，湖沼，森林や湿地で，とくに土地利用と起伏が変化に富む地域が好まれる[36]．しかし，分布のパターンをみると，各方向で広がりが異なり，交通や資源などの相対的評価の上に，近接レクリェーション地域が決定されていることが明らかである．

宿泊を伴う場合，ホテルや民宿のほか，別荘やキャンプ場の利用が多くなってきたことについては既にふれた．近年では，これらのレクリェーション地域で，散歩道・駐車場・各種スポーツ施設・案内板など，いわゆるインフラストラクチャーの整備に力が注がれている．ここではまた，宿泊施設のほか，レストランなどの関連産業が発達し，土地利用などにも大きな変化がみられるようになってきた．これらのことは，近接レクリェーションの核心地が形成され，その周辺地域が，レクリェーション空間としての意義をますます高めつつあることを示している．

V　レクリェーション空間の特性—むすびにかえて—

レクリェーションの発達は，西ドイツにさまざまな空間的影響を与えてきた。まず，その一つは，巨視的にみれば，M. Clawson が主張しているのと同様に[38]，ライン川流域からルール地域にかけての人口密集地域や他の大都市を中心として，立地・形態・規模・性格等を異にするレクリェーション空間が形成されているとみることができることである．つまり，人口密集地域の周辺には，利用者により規定される近接レクリェーション地域が発達し，アルプス地域や北部の沿岸地帯には，資源立脚型の観光地が発達している．しかし，近年では，多様なレクリェーション活動や交通の発達によって，さまざまな種類のレクリェーション空間が幾重にも重なり，交錯して成り立っていることに，より強い特徴を認めることができよう．

レクリェーションの発達は，景観形成という点でも大きな影響を与えてきた．その影響には，二つの側面がある．一つは，肯定的な影響である．レクリェーションは，農村地域や経済後進地域の就業機会の拡大を可能にするといった経済的効果をもつ．また，開発を通して，文化的刺激が与えられたり，インフラストラクチャーの整備がなされるといった効果もある．このような事例は，アルプスなどの観光先進地域では枚挙にいとまがない．

しかし，一方では，レクリェーションはさまざまな悪影響をも結果してきた．環境破壊，よそ者の増加や生活様式の変化などによる地域生態の崩壊，地域社会の財政的負担の増大といった問題であ

る．たとえば，近年発達の著しい別荘集落やキャンプ場は，比較的集約的な土地利用形態で，環境破壊を招きやすい一方，多くのインフラストラクチャー施設を必要とし，そのうえ経済効果も小さい．シェヴァルツヴァルトでは，観光化に伴って社会的休閑地がふえ，環境保持のため草刈りの出費を余儀なくされている市町村の例もみられる．

これらの事実を踏まえながら，増大するレクリェーション需要に対処するため，西ドイツではさまざまなレベルでレクリェーション空間の開発・整備が行なわれている[39]．それは，連邦政府の「地域経済構造改善（Verbesserurg der regionalen Wirtschaftsstruktur)」策に基づく一連の事業のほか，州計画の中でも重要な部分を占める．たとえば，バイエルン州の「州発展プログラム（Landesentwicklungsprogramm)」の中には，1,300以上のレクリェーション関連プロジェクトがあるという[40]．ここでは，とくに近接レクリェーション地の整備が促進されている．ほかに，各種地域計画や市町村計画の中にも，レクリェーション関連事業が重要な位置を占めるものが少なくない．事業の推進にあたっては，土地利用規制や環境保全に細心の注意が払われている．森林の再生で示されるように，ドイツ人の環境保全に対する意識はきわめて高い．

一連の観光研究を行なってきたK. Ruppertは，よりよいレクリェーション空間を創造するために，公共体が積極的に推進すべき課題について断片的に言及している[41]．それらによれば，今後の課題は，大都市内のレクリェーション空間の創造，大都市周辺のレクリェーション空間の開発・整備，アイヒェル・バイエリッシャーヴァルトなど経済後進地域での観光開発，アルプスなど先進観光地域でのインフラストラクチャーの質的改善とまとめることができよう．この指摘は，西ドイツのレクリェーション空間の特徴と問題点をよく示している．

以上のように，西ドイツでは既に，レクリェーション空間が重要な機能を担ってきた．今後，脱工業社会の進展や，年2回の休暇旅行の普及などによって，その重要性はますます高まるものと考えられる

本稿の作成にあたり，DAAD奨学生としての留学期間はもとより，その後も資料の提供やご教示を頂いたK. Ruppert（ミュンヘン大学），J. Maier（現バイロイト大学）の両教授に感謝申し上げます．また，製図を依頼した，筑波大学の宮坂和人氏にも，末筆ながらお礼申し上げます．

注・参考文献

1）K. Ruppert (1980)：Grundtendenzen freizeitorientierter Raumstrukur, *Geogr. Rundschau. Jg.* **32**, 178—187

2）石井英也(1979)：西ドイツにおける観光・レクリェーション地理学の研究動向，筑波大学・人文地理学研究Ⅲ，149—167

3）H. Robinson(1970)：*A Geography of Tourism*, 3～16, London

4）K. Ruppert u. J. Maier(1970)：Zur Geographie des Freizeitverhaltens, *Münchner Studien zur Sozial- u. Wirtschaftsgeographie*, **Bd. 6**, 9～36

5）これは，14歳以上の人々を対象にしたアンケート調査に基づくものである．

6）J. Maier(1973)：Freizeitverhalten und Touri-

smus in Europa, in *Bertelsmann Lexikon, Länder und Völker, Teil Europa* **Bd. 1**, 306～311

7) L. Czinki u. W. Zühlke(1966) : Erholung und Regionalplanung, *Raumforschung und Landesplanung*, **H. 4**, 155～164

8) K. Ruppert u. J. Maier(1970) : Naherholungsraum und Naherholungsverkehr, *Münchner Studien zur Sozial- u. Wirtschaftsgeographie* **Bd. 6**, 55～77

9) これらの定義に従えば，日本の旅行はほとんどが近接レクリエーションの範疇に含まれることになる．これらについては，H.Ishii, Distribution of Major Recreational Regions in Japan, *Frankfurter Wirtschafts- und Sozialgeographische Schriften* に投稿中.

10) 前掲1)

11) W. Ritter (1965) : Fremdenverkehrsgebiete in Europa, in *Festschrift zum* 60 *Geburtstag von L. G. Scheidle, Teil* **1**, 288—306, Wien

12) H. Hahn (1958) : Die Erholungsgebiete der Bundesrepublik—Erläuterung zu einer Karte der Fremdenverkehrsorte in der deutschen Bundesrepublik, *Bonner Geographische Abhandlungen*, **H. 25**

13) R. Klöpper (1955) : Der Fremdenverkehr in Niedersachsen, *Geogr. Rundschau* **9—5**, 194—201

14) たとえば，J. Dodt (1967) : Der Fremdenverkehr im Moseltal zwischen Trier und Koblenz, *Forsch. zur deutschen Landeskunde*, **Bd. 162** など.

15) A. Weber (1958) : Geographie des Fremdenverkehrs im Fichtelgebirge und Frankenwald, *Mitt. d. Fränk. Geograph. Ges.* **Jg. 5**, 35—109

16) E. Grötzbach (1968) : Die Entwicklung der bayerischen Fremdenverkehrsgebiete in den letzten 40 Jahren, *Mitt. d. Geograph. Ges. München*, **Bd. 53**, 267—292

17) K. Ruppert (1964) : Almwirtschaft und Fremdenverkehr in den Bayerischen Alpen, in *Tagungsbericht und wiss. Abh. d. Deutschen Geographen Tages in Heidelberg*. 1963, 325～331

18) J. Maier (1970) : Die Leistungskraft einer Fremdenverkehrsgemeinde— Modellanalyse des Marktes Hindelang / bayer. Allgäu—, *WGI Berichte zur Regionalforschung*, **Bd. 3**

19) K. Ruppert(1967) : Beiträge zu einer Fremdenverkehrsgeographie—Beispiel, Deutsche Alpen—, *Wiss. Abh. d. Geograph. Ges. d. DDR*, **Bd. 6**, 157～165

20) G. Glauert 著，佐々木博・石井英也・桜井明久訳(1980)：アルプス—自然と文化—，二宮書店

21) 前掲1).

22) R. Klöpper (1974) : Die räumliche Struktur des Angebots von "Urlaub auf dem Bauernhof", *Schriftenreihe des AID*, **H. 179**

23) 前掲1).

24) 佐々木博(1980)：西ドイツの農地整備事業，筑波大学・人文地理学研究Ⅳ，9～49.

25) S. Diekmann(1963) : Die Ferienhaussiedlungen Schleswig-Holsteins, *Schrift. d. Geogr. Inst. d. Uni. Kiel*, **H. 3**

26) K. Ruppert u. J. Maier (1971) : Die Zweitwohnsitz im Freizeitraum, *Informationen* (Inst. f. Raumordnung), **Jg. 21**, Nr. 6, 135～157

27) たとえば，フランスでは別荘地に関して，より多くの研究がなされている．それによれば，1967年にフランスでは，7.2％の世帯が別荘を所有し，11,1％の世帯が別荘を賃借していた．それら別荘のうち，20.3％は海辺に，11.8％は山岳地域に，61.9％は田舎に，そして6％が都市内にあった.

28) 前掲1).

29) G. Fritz u. D. Lassen(1977) : Untersuchungen zur Belastung der Landschaft durch Freizeit und Erholung in ausgewählten Räumen, *Schriftenreihe für Landschaftspflege und Naturschutz*, Nr. 15

30) P. Schnell u. P. Weber hrsg.(1980) : Agglomeration und Freizeitraum, *Münstersche Geographische Arbeiten*, **H. 7**

31) ミュンヘン大学経済地理学研究室は，1968年に，ミュンヘンの約6,000世帯，20,000人を対象として，近接レクリエーション活動に関するアンケート調査を行なった．なお，成果の一部は，下記の論文として公表された．前掲8) およびK. Ruppert u. J. Maier(1970) : Der Naherherholungs-

verkehr der Münchner, *Mitt. d. Geogr. Ges. München*, **Bd.55**, 31～44

32) E. Johannes (1955) : Entwicklung, Funktionswandel und Bedeutung städtischer Kleingarten, *Schriften d. Geogr. Inst. d. Uni. Kiel*, **Bd, 15**, H. 3

33) 前掲31).

34) 前掲８). 西ドイツの社会階層は，上層が企業家や医者，大学教授などで２～３％，中層が小売，手工業者，農民などの中小自営業者，管理職や職員，自由業者などで40～45％，下層は労働者を中心として，50～55％を占めるといわれている.

35) G. Olschowy u. W. Mrass (1956) : Zur Ermittlung aktueller und potentieller Erholungsgebiete in der Bundesrepublik Deutschland, *Berichte über Landwirtschaft* **54-2**, 171～194. ただし，この調査のアンケート規模などは不明である.

36) H. Kiemstedt (1967) : Zur Bewertung der Landschaft für die Erholung, *Beiträge zur Landschaftspflege*, Sonderheft 1

37) J. Maier (1973) : Die Sitzplätze in Gaststätten —Ein Indikator auf der Angebotsseite für Freizeit und Erholung—, *Informationen* (Inst. f. Raumordnung), **Jg. 23**, Nr.9, 179～192

38) M. Clawson (1960) : Land for Recreation, in *Land for the Future*, ed. by A. Ackerman, M. Clawson and A. Harris, 124～193, Baltimore

39). Die Akademie für Raumforschung und Landesplanung (1980) : Empirische Untersuchungen zur äußeren Abgrenzung und inneren Strukturierung von Freizeiträumen, *Forschungs-und Sitzungsberichte*, **Bd. 132**, Hannover

40) 前掲１).

41) 前掲１)など.

Some Characteristics of Recreational Space in West Germany

Hideya ISHII

The author once reviewed the trend and characteristics of geographical studies on recreation and tourism in West Germany (see note 2. in this article). The purpose of this paper is to describe in detail recreational space and its recent changes in West Germany, mainly based on literature on this subject. Chapter II deals with the development and the types of recreational activities. Chapter III discusses the space of tourism (Fremdenverkehrsraum) and its new tendencies, and Chapter IV the space of weekend tourism (Naherholungsraum). Chapter V points out some characteristics of recreational space in West Germany.

The development of recreation has exerted various spatial effect in West Germany. From a comprehensive point of view, it can be said, as W. Ritter (see note 11.) and M. Clawson (see note 38.) insisted, that recreational space in West Germany is composed of some recreational zones, which are arranged around the densely inhabited areas, and which differ in their location, form, size and character. That is, while the user-oriented recreational regions (Naherholungsgebiete) have developed relatively near the densely populated areas, the resource-oriented tourism regions (Fremdenverkehrsgebiete) have developed in the German alpine area and in the northern coastal area. But, a recent outstanding feature could be seen in the fact that recreational zones, based on various leisure activities, become complicated and overlap each other, with the diversification of recreational activities and the development of transportation means.

The development of recreation has also influenced the formation of recreational landscape. The influence has two aspects. One is the positive influence. Recreation has, for example,

not only economic effects such as expansion of opportunities for employment in rural areas and underdeveloped areas, but also cultural influence through the development of infrastructure. Such examples are numerous in the developed recreational regions in the German alpine area. On the other hand, the development of recreation sometimes results in the negative influence. It may cause troubles like environmental destruction, breakdown of regional ecology owing to the increase of foreigners (Ausmärker, Ortsfremder), the financial embarrasments of communities etc. Recent rapid development of second house and camping ground is an instance. They demand improvement of infrastructure, neverthless they have little econmic effect on the related communities and have a tendency to cause natural destruction.

Appreciating these facts, in West Germany the development and improvement of recreational space have been attempted at various levels, to cope with the increasing demand for recreation. As far as public initiatives are concerned, the federal and state governments' improvement programs of leisure space are especially important. Many commercial and public establishments of the leisure sector have been subsidized by means of the common task "Improvement of the Regional Economic Structure". In addition, there is an advancement program of the state of its own. In Bayern, for example, more than 1,300 projects are subsidized on the basis of "Development programs" of the state. Besides, there are many other leisure-related programs in various regional and municipal plans. In carrying out these projects, however, land use control and environmental conservation are taken against too serious exploitation. The German people have showed deep concern with the preservation of environment.

Prof. Karl Ruppert, who has made a series of recreational studies, has pointed out in some of his papers several tasks of the public body in order to create better recreational space. According to him, these tasks may be summarized as following, the creation of leisure space in large cities, the development and improvement of recreational space in the surrounding areas of densely inhabited regions, tourism exploitation in underdeveloped areas like Eichel, Bayerischer Wald etc., and qualitative improvement of infrastructure for leisure activities in developed tourism regions like German Alps. This indication shows well the characteristics and problems of recreational space in West Germany.

In fact, recreational phenomena have played an important role in the formation of spatial structure in West Cermany. The significance of recreation will be greater in the future with the progress of post-industrial society.

I would like to thank Professors K. Ruppert, the University of München, and J. Maier, the University of Bayreuth, who gave suggestions and relevaht data to my research during my stay at the University of München and thereafter.